

---

K I S H I D A I A M.45 目 次 頁

佐藤さんのビショオニグモに関する文章を読んで	中 平 清	1
タテヤマサラグモ	佐 藤 幸 子	3
乾燥・収縮してしまったクモの復元方法	松 本 誠 治	6
Note. クサグモ(1) —— 共食いについて ——	栗 原 輝代子	7
三浦半島の真正蜘蛛類	熊 田 憲 一	9

— DRAGLINE —

台湾の網を張るコモリグモ	吉 田 勢	28
銅育中のアシダカグモの産卵行動	松 浦 祐 司	28
卵のうから出たムシ	蓮 沼 克 己	28

観察会報告 1977年春～1979年冬

巾着田のクモ

鳴田順一・田中理恵 29

編集後記

---

## 佐藤さんのビジョオニグモに関する文章を読んで

中 平 清（高知県吾川郡春野町芳原600）

佐藤幸子さんがKishidaiaのNo.41～43(1977年～1978年)に書かれたビジョオニグモに関する文章を読んで、大きな喜びと驚きを感じた。佐藤さんは、卵から卵のうを脱出した幼体までを中心に観察されている。私の持っている文献によるかぎりでは、本種の生態については不明な点が多くある。特に、孵化から分散直後までの幼体の生活状態は全く不明である。こういう意味からも、佐藤さんの観察記は、私にとっては大変貴重な資料である。私は何回も読み、そしていろいろなことを考えた。その若干の事柄について述べてみる。ところで、他人の文章を読みこなすということは私には苦手である。従って、誤解のある文になるかもしれない。そういう点は、この大少にかかわりなくご指摘いただきたい。

私がまず驚いたのは、

『私の家のビジョオニグモはまどいしない様で、暖かい日に少しづつ卵のうを離れて散って行きます。』(No.42, P.14)

というところであった。私は、その形式はどうあれ、「まどい」は、すべての子グモが分散直前に見せる行動であり、すべてのクモに共通した習性であると見、思いこんでいたので、ほんとにびっくりした。読みあやまりを恐れて、繰返し読んでいるうちに「変型まどい」という言葉が頭にうかんだ。この言葉の当否は別としても、このクモもやはり「一種のまどい行動」を経た後に分散していくもののように思ったのである。ビジョオニグモの、卵のうから出てきた子グモの状態は、

『まどいをするかの様に見えた空間には一匹の子グモも居ません。あちこち調べますとあちこちの葉先に住居を作つて落着いていました。一匹だけのものもあり、三四匹同じ住居に入っているものもありました。』(No.42, P.14)

『ほかの子グモで四五匹仲良く住んでいたところも分散したらしく、皆一匹づつになっていました。』(No.42, P.14)

『小さな狭い住居の中に二列に並んで六匹、七匹と仲良くしている姿はほほえましいかぎりです。』(No.42, P.15)

といったものである。そして、この『住居』というのは、母グモの住居と同じ形式のものであり、そこにある子グモの姿勢は、

『卵のうから出てためらわずに住居を作つた子グモ達は、皆頭を天に向けて(すなわち私達の立姿と同じ格好で)静止していました。』(No.42, P.15)

『五六匹も一緒の時は満員で身動きも出来ませんが、前にも書いたように二列に並んでやはり頭を天に向けて静止していました。けれど一度円網を作るとそれ以来クモ本来の姿に戻つて頭を下向きにし、もう変ることはありません。』(No.42, P.15)

のように、獲物を待機している時の姿勢とは明らかに違う。確かにまどい状態にあるクモの多くが

KISHIDAIA No.45 1980, Mar.

とっている姿勢である。それから、

『一枚の葉のつけ根に 8 個位の真黒い毛虫の玉のようなものがくっついているので、よく見るとどうでしょう、10匹の子グモが重なり合ってダンゴになっているのです。』(『16.43, p.7』)

これは明らかに、普通に見るまどいそのものである。1つの卵のうから出た子グモは1かたまりになってまどいするが普通であるが、2~3塊に分れているのも珍らしいことではない。まどいする理由はまだ解明されていないが、とにかく複数の子グモが身を寄せ合っている状態がまどいである。実験的に個個ばらばらにした場合でも、その時の姿勢は集団時と同じである。普通に見るまどいは、上に言ったように大きな1塊であるが、ビジョオニグモの場合は、極度に小さく分れたものと見てよいのではなかろうか。そして、その場は、ある1頭(他個体よりも少し早く成長したものか?)が作った住居内であり、子グモたちはそこから分散していく。このようなことから私は「変型まどい」と呼んでみたのである。

次におもしろいと思ったのは、分散当時の子グモの張る網はキレ網ではなく完全な円網であるという点であった。馬蹄型の網を張るショロウグモの初期幼体の作る網は、正常円網であることはよく知られているところである。この円網の中心すなわちこしきの位置が、クモの成長にともなって次第に網の上縁の方へ移動するために、足場糸や横糸は折返し運動によって張らざるをえないで結果的に蹄型円網となるのである。ところで、このビジョオニグモの場合、いつ、どのような過程でキレ網に変るのであろうか。正常円網からキレ網へは、とても大きな変化であると思うが、網の進化をえる上で大いに興味のそそられることである。

次は、本種の発生期についてのことであるが、佐藤さんの観察されたものは、卵体で越冬し、3月に孵化(1977年には3月5日、1978年には3月12日に孵化が始まっている。)したものである。ところが、大利さんは、このクモが産卵した日として5月15日、5月28日を記録している(大利昌久, 1962. クモの産卵及び卵のう, *Atypus Nos. 26-27: 34-41*)。また、3月17日にも卵のうを観察されている(大利昌久, 1963. クモの生態観察日記(4), *Atypus 16.31: 23-26*)。後者の場合は佐藤さんのと一致し、卵体または孵化直後の幼体のものであろう。すると、ビジョオニグモは、初夏と晚秋に発生(産卵と言うべきか)が行なわれ、2か年間に3世代を完結する種であろうか。

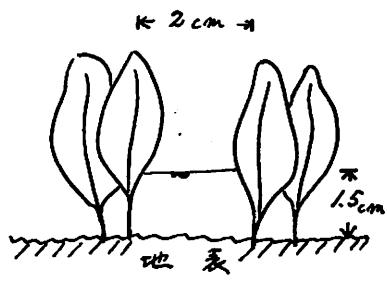
佐藤さんからのお便りによると、転居されて、ビジョオニグモの継続観察を中断せざるを得なくなつたそうである。大変残念なことである。佐藤さんが、できるだけ早く観察再開の好機をつかまれることを祈るとともに、どなたか幸運にめぐまれて、佐藤さんの観察記を土台にして、本種の生態をより明確なものにしていただきたい。こういう願いをこめて、あえて駄文をはじめ、これを草したのである。

1979年5月1月

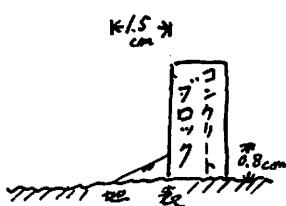
## タテヤマサラグモ

佐藤幸子

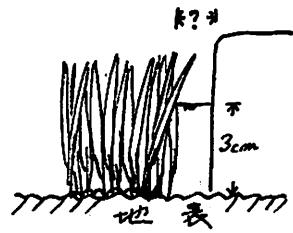
1979年3月上旬 温度2°C~11°C 庭のタテヤマサラグモに気がついたのは此の頃でした。夜はまだ寒いのに昼はポカポカと暖い毎日で、地表より高さ3cmの草花の間に3個体仲良く生活していました(図1)。庭におきはなしにしてあるブロックを利用して住居を作っているものも5個体以上いました(図2)。総体黒っぽい赤褐色で、赤褐色の歩脚は折れそうに細く見えます。



(図 1)



(図 2)

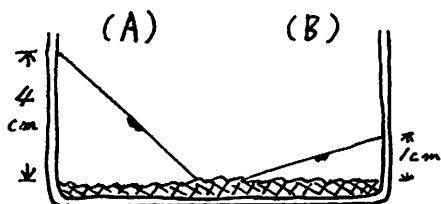


(図 3)

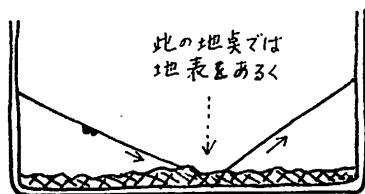
6月上旬 温度17°C~24°C 今まで住居を作っていたところに誰も姿を見せません。必死の思いでさがしますと、陽のあたらない湿気の多い場所、それも2ヶ所に別れて住んでいます。コンクリートのテラスに芝が密着している所(図3)と、落葉や枯枝の重なったその中にもぐっている個体と、それぞれ1分間に10個体は見つかりました。それで前者を(A)後者を(B)とし容器に入れて観察する事にしました。(容器 直径12cm高さ7cm)

◎容器の中に2個体入れた場合、容器の $\frac{1}{2}$ づつを所有する。個体によって網の地表よりの高さがちがう(図4)。容器の中に1個体だけ入れると容器全体を所有し、右往左往して糸を充分に使用する。此の場合も(A)は4cmの高さから網を張り(B)は1cmの高さに網を張る。これは最後までかわらない。網は糸を引きまわしただけの簡単なものであるが、かららず中央を地表につけてある(図5)。

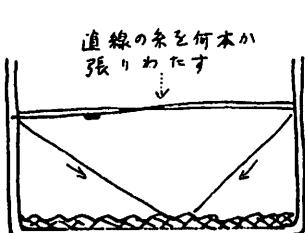
◎(A)の場合日数が過ぎるにつれて糸の張り方が変る。(図5)→(図6)→(図7)。(図7)になると1日位で取りこわし(図5)にもどる。(B)は最初から最後まで(図5)であった。糸は非常に細くて見えにくい。



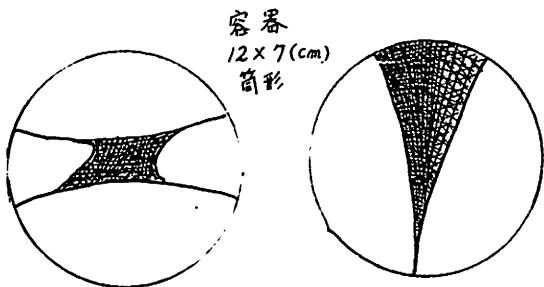
(図 4)



(図 5)



(図 6)



(図 7)

◎地表の糸に獲物がさわると走り下りてとらえる。逃がした場合地表を追いかける。捕えた場合噛みつくだけで糸を使用しない。網(糸?)が破れると獲物をくわえたまま修繕する。獲物はかならず空間でたべ、たべかすはそのまま放置する。いつも空間にいる。空間でも地表でも走り方は非常に早い。

2個体ともに交接後だったらしく産卵しました。

(A) 高いところに産卵したいらしく、容器のフタまで登って来てウロウロ歩きまわっていましたが、2度共に容器のフタに卵を産みつけました。(体長 2.00 mm)

卵ノウ 白色(一日たつとピンクになる)

卵 黄色又は淡黄色(★じるし)

産卵日	卵数(大きさ)	フ化(体長)	脱皮(体長)	分散
①7月24日	17個(0.4 mm)	7月30日(0.5 mm)	14匹	8月1日(0.6 mm)
★②7月30日	15個(0.4 mm)	全個フ化せず	—	8月1日

8月9日 親グモが行方不明になりました。死亡したものと思われます。

(B) 深さ7 cmの容器の半分位のところに何時も産みつけました。(体長 2.00 mm)

卵ノウ 色及び型は(A)とまったく同じ。

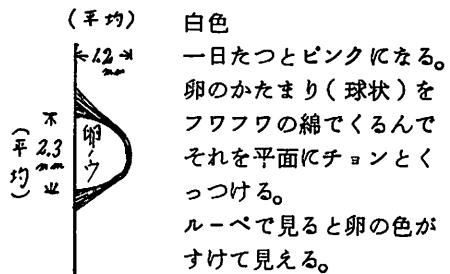
卵 色も(A)とまったく同じ。★じるしは淡黄色。

産卵日	卵数(大きさ)	フ 化(体長)	脱 皮(体長)	分 散
① 2月27日	15個(0.4mm)	8月 1日(0.5mm) 7匹	8月 3日(0.6mm) 1匹	8月 4日
② 8月 1日	16個(0.4mm)	8月 7日(0.5mm) 8匹	8月10日全個体死亡	——
★③ 8月12日	11個(0.4mm)	8月17日(0.5mm) 6匹	8月19日(0.6mm) 3匹	8月20日

8月23日 親グモ死亡。

#### 卵ノウの比較

	(A)		(B)			単位
	①	②	①	②	③	
直径	3	2.3	2.3	2.2	1.1	mm
厚サ	1.2	1.2	1.2	1.5	1	mm
卵数	17	15	15	16	11	個



タテヤマサラグモの卵は、コサラグモ科の卵と同じ容器に入れて観察していたのですが（湿気その他すべて同じ環境）フ化時の全員が全個体脱皮し、全個体分散したのは（A）①だけで、あとは脱皮時にフ化時の半数、及びほとんどが死亡しています。（コサラグモ科の卵はフ化時の数と分散時の数が同じ）自然の中では此の観察と同じなのかどうか疑問です。もし同じであったとすれば、タテヤマサラグモの生存は非常にキビシイものであります。

## 乾燥・収縮してしまったクモの復元方法

松 本 誠 治（杏林大学医学部生物学教室）

1979年12月16日に行なわれた三会合同例会の席上紹介した乾燥してしまったクモの復元法を以下記録しておきたいと思います。

飼育中あるいは採集後、液浸標本とする機会がないまま、乾燥・収縮してしまったクモは、そのまま70～75%アルコール中に保存しても、体形が復元しないままになってしまいます。そのため、乾燥してしまったクモを標本にするのはあきらめて、管瓶だけを回収することになります。この際、クモを管瓶に入れたまま洗剤に浸けておいたところ、クモは、ふやけて生きていたときと同じ状態近くになっていることに気がつきました。そこで、このことを利用して、乾燥したクモの復元を試みたところ、「まあ、満足」といえる結果となりました。液体中性洗剤は、普通500倍ぐらいに薄めて使うように、その使用法に書いてありますが、もっと濃いために、100倍ぐらいの稀釀液中にクモを入れておきます。頻繁に検査しながら、また、なかなか復元しないようならば、稀釀液を新しいものと交換して液の腐敗を防ぎながら続けます。この結果復元したクモを、数段階のアルコールシリーズを通して、70～75%のアルコール液浸標本とします。クモによっては、アルコールに入れると、また体が収縮するものもでてきますが、このような場合は再度洗剤溶液にもどせば大丈夫です。その後は、アルコールシリーズを注意深く、時間をかけて通過させる必要があります。この方法で復元したクモの中には、飼育中死亡したムツトゲイセキグモの雌（成体）（千葉県東金市産・1979年10月8日安藤博司氏採集）も含まれています。

例会の席上紹介した方法は以上のようなのですが、そのとき鈴木恵一氏より、浸透圧の関係で復元するのではないだろうかとの意見をうかがい、もう一つ、表面活性剤による水との親和性も考える必要があると話をしました。そこで、翌日早速、乾燥収縮してしまったクモをみつけ出し、100%エタノール中に入れた後、蒸溜水に浸けておいたところ、洗剤での復元と同様に、満足のいく結果が得られました。クモは、カラオニグモでした。

乾燥・収縮してしまったクモを、カセイソーダやカセイカリ溶液の処理によって復元しようとする試みは、クモの外骨格や関節部分を軟化させ、体の変形を招きます。特別な目的のない限り、このような乱暴な処理は好ましくありません。勿論、洗剤やエタノールと水によって復元させた標本を測定材料とすることは避けるべきでしょうが、棘や剛毛・*Trichobothria* などの観察には充分利用できます。

以上、乾燥してしまったクモの復元方法を紹介しましたが、アルコール液浸標本が乾燥してしまった後の復元にも使用できるか否かは不明です。

## Note. クサグモ (1) —共食いについて—

栗原輝代子

私は、2～3年前から、クサグモの幼体越冬について調べています。クサグモの生活については、まだまだわからないことがあります、野外や飼育での観察でちょっとした興味ある行動や疑問などを少しずつ書いてみようと思います。というのも、どんな小さな事でも大切な記録であることを切に感じるからです。さあ、どれだけ彼らの秘密に光をあてられるでしょうか……。

クサグモ (*Agelenopsis limbata*) は、御存じのように、1年で生活を終える1世代のクモです。9月下旬頃産卵し、14～15日程度でふ化し、7～10日程で2齢の幼体となり、そのまま卵のうの中で越冬します。そして、翌年の3月下旬～4月上旬頃卵のうから出て、それぞれの生活を営み秋を迎えます。

私が、今一番深い興味をもっているところは、その2齢の仔グモが約4ヶ月の間、寒さをしのぎながらも摂食せずにひたすら春を待っている、というその生活ぶりです。そして、成長すればお互いが敵となる可能性をもつ個々が、長い間卵のうの中に固まって忍んでいるという不思議にも、とりつかれてしまっています。この疑問は、なかなか解明に至りませんが、少しずつその機構はわかりはじめています。今回は残念ながらその話しではありません。

卵のうの中での長期間にわたる生活の中でいったい、共ぐいといわれるものが起っているのかどうか、またそれは、起るとしたら普遍的なものだろうか? ということを少し前から考えていました。様々の人がクサグモや、その他のクモでの共ぐいの現象を観察した、ということを耳にしますが、それがいったい、すべての卵のうに起ることなのか、又は極めて偶然に近い事故的な要素を含んだものなのか、私には判断しかねます。そこで、ひとつの卵のうを使って越冬の状況を観察してみることにしたのです。もとより、このクモの卵のうをたくさん扱っていますが、相対的にふ化率は極めて良く、仔グモが出のうした後の卵のう内にはふ化殻と1齢の脱皮殻が残っているだけで、共ぐいの残物とみられるようなものは発見したことがありませんでした。またふ化率の悪い卵のうについても、上記同様のことがいましたがしかし、定性的にではありますが出のうしてくる個体が大きいものも時々みられました。一般に共ぐいには、発育段階のちがう者との間に起るものと、発育段階の同じ者との間に起るとが考えられます、前者については今回は考えないことにしました。

1978年10月24日、卵のうの中の仔グモが2齢であることを確認して、卵のうを破き、プラスチック容器(高さ7.8cm、φ3.8cm・透明・ふた白色)に仔グモ(45匹)を移しかえました。そして、直射日光のあたらない地上より約1mの高さの場所で保存しました。12月8日には2～3の固まりができ、その後その固まりはいろいろ変化し、1979年3月には少しずつ仔グモ達が動き回るようになり、5月3日、最終調査をしたところ45匹元気に越冬を終えました。この45匹の間において、共ぐいという現象が必ず起こるというものであるとしたらこれは一つの観察例になるのではないでし

KISHIDAIA No.45 1980, Mar

ょうか。栄養補給のために、共ぐいが必要であるとしたら、何匹かは犠牲になることになりますが、1卵のうにつき平均70匹もいる個体の栄養補給であれば、そうとうの数が犠牲にならざるを得なくなるでしょう。強くて、餌を得られたものだけが生きのびられるというにしては、元気に出のうしてくる数が多すぎると思います。私は発育段階の同じ者どうしの共ぐいは、卵のう内ではしない、とまでは断言できませんが、もし起るとしてもそれは何か偶然性の高い事故的要素の強いものによって起るのではないかと考えます。しかし、何かの事故が、どのようにして起こり、それがどうして共ぐいに至るのかということは、大きな疑問として残りましたが…………。

— DRAGLINE 28頁の続き —

卵の色もだんだん変わり、まもなく出るだろうと思っていたところ、7月13日に、ヒメカマキリモドキ(*Mantispa japonica* MacLachian)が出ていた。

ヒメカマキリモドキは、開張23~24mmぐらいで、日本全土に分布し、7月~8月中旬にかけて各地の山地に比較的普通で、幼虫はエドコマチグモの卵のうに寄生するという。

前日までは、卵のう内に卵が見られたが、13日には、まったく見られなかった。キアシの卵殻はあったが、食われたカスは見あたらなかった。ヒメカマキリモドキの脱皮殻は、卵のう内と外に二つあった。

飼育中に、外から入ることは考えられないで、親のからだに、幼虫がついていて、卵のうを作るときに、卵のう内に入ったとしか考えられないが、はっきりしたことはわからないので、観察される機会があったら、して見たいし、観察された方は、お知らせください。

## 三浦半島の真正蜘蛛類\*

熊田 窓一\*\*

三浦半島は神奈川県の南東に位置する半島で、200mほどのゆるやかな山地と沖積層の平地から成り、南部には関東大震災の際に隆起した海蝕台地を見る事ができる。山地には谷戸が発達しており、山地は南部に行くにしたがい台地化し、それらは海岸近くで急速に海岸線と接続している。植物景観は常緑樹が多く、暖帶性のクロマツ・タブノキ・クスノキ・シイ・カシなどが目につき、長い海岸線には海浜植物が多く、ハマヒルガオ・ハマボッス・ハマボウフラ・ラセイソウ・トベラ・マサキ・ハマモッコクなどを見る事ができる。半島内の気温は、そのほぼ中央を15°Cの等温線が横切り、ハマオモト・ハマボウの分布北限としても知られており、相模湾岸の一部には無霜地帯も見られるように県内最高で、房総半島南端よりわずかに低くなっている。そのほか三浦半島は都心から近く、夏には海水浴場に多くの人が集まり、また、今年(1979年)のNHK大河ドラマの舞台でもある鎌倉に近接し、時の豪族三浦氏の領地でもあり、その城跡・衣笠城跡やベリー来港の浦賀・久里浜、葉山の旧御用邸、軍港横須賀、観光地としての油壺・城ヶ島などが有名である。

三浦半島のクモについては、植村利夫氏が大楠山のクモ14種を1938年に発表したのに始まり、1940年には細野善熙氏がイソハエトリ、町田徳治・松下博吾両氏の神武寺のクモ72種が発表されている。さらに30余年の空白をおいて、1971年大野正男・八木沼健夫両氏により半島部73種・城ヶ島24種が発表されて現在に至っている。以上の記録により、半島内では城ヶ島を含んで114種が知られることとなった。しかし記録を整理した結果、古い記録にあるシロカネグモ・ヒメコモリグモ・ジウノジハエトリの3種が現在のどの種にあたるものか不明であったため、今回はこの3種を除いた111種を明らかな記録として扱った。

私は1973年以降当地を訪ぎれ、過去の記録の再確認、新しい種の記録を行ない、その結果、1979年6月現在203種を確認することができたので、ここに報告する。

なお、目録の分布の項で全域とあるものは、半島部全域を示す。猿島・城ヶ島を別記しているのは、分布状態が半島部と異なるという意味ではなく、地理的に半島部より離れているという意味でここでは別に記入した。また、〔 〕を記したものは、文献より引用した記録である。

報告に際し、クモ全般に関しあわせわになっている新海栄一氏・松本誠治氏と、採集等に協力していただいた山川守氏、資料を提供して下さった千国安之輔氏に感謝の意を表する。

---

\*\* Kumada Kenichi

\* Spiders of Miura peninsula, Kanagawa prefecture.

KISHIDAIA N.45 1980, Mar

### Antrodiaetidae

1. *Antrodiaetus roretzi* (L. Koch) カネコトタテグモ

全域・猿島・城ヶ島

土質の崖や地面に両開きの扉をつけた住居を作る。海岸から10mほど離れた海拔1.5m~2mの崖でも住居を見つけることができた。県内では丹沢の1200mほどの地点でも見られ、かなり高低幅のある分布をしていることが明らかになった。また、半島から2kmほど離れた猿島にも多くの個体が見られる。猿島が島として独立する以前より棲息していたものか、バールニング（カネコトタテにおいては未確認）によるものか、明治よりの軍事基地としての歴史を持つため、その工事等により人為的に分布したものかは不明である。東京湾をへだてた房総半島からはみつかっていない。

### Ctenizidae

2. *Latouchia typica* (Kishida) キシノウエトタテグモ

逗子

県内では山間部や内陸部では記録されておらず、当地と鎌倉・横浜・川崎でのみ知られている。石垣の間の土や崖に住居を作り、一枚扉をつける。

3. *Ummidia fragaria* (Dönnitz) キノボリトタテグモ

上山口・観音崎・城ヶ島

### Atypidae

4. *Atypus karschi* Dönnitz ジグモ

全域

5. *Calommata signatum* Karsch ワスレナグモ

神武寺

平らな地面に住居を作る。地面表面に巣口が直接開いているもの、雨よけとも言われている巣口に延長部をつけたもの、垂直につけた延長部がつぶれて、まるでカネコトタテグモの巣口を思わせるものまで、いろいろなタイプの巣口が見られた。

### Amaurobiidae

6. *Titanoeca nipponica* Yaginuma ヤマトガケジグモ

全域

特に横須賀線・京浜急行各線の道床に特に多く見うけられる。

### Dictynidae

7. *Dictyna felis* Bös. et Str. ネコハグモ

全域

クスノキ・サンゴジュのような広葉樹の葉の表に天幕をつけた網を張るほか、建物の隅にボロ網を作る。

8. *D. foliicola* Bös. et Str. ヒナハグモ

逗子

9. *Lathys humilis* Blackwall カレハグモ  
逗子・猿島
10. *L. punctosparsa* Oi ナシジカレハグモ  
荒崎  
海岸に積まれた石の下より採集した。
11. *L. puta* (O. P. Camb.) キイロカレハグモ  
田浦  
石垣・コンクリートの崖に小さなボロ網を張っていた。最近各地で見られるようになってきた種で、カレハグモによく似る。

**Uloboridae**

12. *Miagrammopes orientalis* Bös. et Str. マネキグモ  
〔神武寺(町田・松下: 1940)〕
13. *Uloborus sybotides* Bös. et Str. カタハリウズグモ  
全域
14. *U. tokyoensis* Kishida トウキョウウズグモ  
〔神武寺(町田・松下: 1940)〕
15. *U. varians* Bös. et Str. ウズグモ  
全域

**Oecobiidae**

16. *Oecobius annulipes* Lucas チリグモ  
観音崎・油壺・城ヶ島  
人家や神社等の建物の窓のサンなどに住居を作る。住居はヒラタグモの住居を小さくしたようなものが観察発表されているが、観音崎ではサンの角にトンネル状に糸を張って、その中に潜んだ個体を多く見ることができた。

**Segestriidae**

17. *Ariadna insulicola* Yaginuma シマミヤグモ  
観音崎・荒崎・南海岸・猿島・城ヶ島  
海蝕崖の岩の割目にミヤグモと同様な信号糸を出した住居を作る。ミヤグモに似るが小形で、脚が細く色ツヤが良い。
18. *A. lateralis* (Karsch) ミヤグモ  
神武寺・観音崎

**Oonopidae**

19. *Ischnothyreus narutomii* (Nakatsudi) ナルトミダニグモ  
武山丘陵

20. *Orchestina sanguinea* Oi アカハネグモ  
二子山  
落葉層をフルイで振って得た。第4脚がノミのごとく太くなっている。幼体時は淡黄色である。県内では丹沢・大磯でも採集されている。
- Scytodidae
21. *Scytodes thoracica* (Latreille) ユカタヤマシログモ  
〔神武寺(町田・松下: 1940)〕
- Pholcidae
22. *Pholcus crypticolens* Bös. et Str. ユウレイグモ  
神武寺
23. *P. phalangiooides* (Füsslin) イエユウレイグモ  
城ヶ島(千国: 1976)
- Theridiidae
24. *Achaearanea angulithorax* (Bös. et Str.) ツリガネヒメグモ  
全域
25. *A. lunata* (Clerck) カグヤヒメグモ  
全域・猿島
26. *A. tepidariorum* (C. Koch) オオヒメグモ  
全域・猿島・城ヶ島
27. *Anelosimus crassipes* (Bös. et Str.) アシプトヒメグモ  
全域・猿島・城ヶ島
28. *Ariamnes cylindrogaster* Simon オナガグモ  
全域
29. *Argyrodes bonadea* (Karsch) シロカネイソウロウグモ  
全域
30. *A. fissifrons* O. P. Camb. チリイソウロウグモ  
全域
31. *A. fur* Bös. et Str. フタオイソウロウグモ  
全域
32. *A. miniaceus* (Doleschall) アカイソウロウグモ  
〔大楠山(植村: 1938)〕
33. *A. saganus* (Dön. et Str.) ヤリグモ  
神武寺・猿島
34. *Dipoena castrata* Bös. et Str. ポカシミジングモ  
田浦・大楠山・武山丘陵

3 5.	<i>D. flavomarginata</i> Bös. et Str.	キベリミジングモ
	二子山・大楠山・武山丘陵	
3 6.	<i>D. mustelina</i> (Simon)	カニミジングモ
	全域・城ヶ島	
3 7.	<i>D. mutilata</i> Bös. et Str.	コアカクロミジングモ
	二子山・大楠山	
3 8.	<i>D. punctisparsa</i> Yaginuma	シモフリミジングモ
	神武寺	
3 9.	<i>Enoplognatha japonica</i> Bös. et Str.	ヤマトコノハグモ
	剣崎	
4 0.	<i>E. transversifoveata</i> (Bös. et Str.)	カレハヒメグモ
	全域・城ヶ島	
4 1.	<i>Episinus affinis</i> Bös. et Str.	ヒシガタグモ
	上山口	
4 2.	<i>E. caudifer</i> Dön. et Str.	ハラナガヒシガタグモ
	金宝山	
4 3.	<i>Phoroncidia pilula</i> (Karsch)	ツクネグモ
	二子山	
4 4.	<i>Steatoda cavernicola</i> (Bös. et Str.)	ハンゲツオスナキグモ
	城ヶ島	
4 5.	<i>Stenmops nipponicus</i> Yaginuma	スネグロオチバヒメグモ
	全域	
4 6.	<i>Theridion chikunii</i> Yaginuma	バラギヒメグモ
	神武寺・二子山	
4 7.	<i>T. japonicum</i> Bös. et Str.	ヒメグモ
	全域	
4 8.	<i>T. octomaculatum</i> Bös. et Str.	ヤホシヒメグモ
	南海岸	
4 9.	<i>T. rapulum</i> Yaginuma 〔畠山(大野・八木沼: 1971)〕	ギボシヒメグモ
5 0.	<i>T. sterninotatum</i> Bös. et Str.	ムナボシヒメグモ
	全域・城ヶ島	
5 1.	<i>T. subpallens</i> Bös. et Str.	ハイイロヒメグモ
	南海岸	

冬期, 石や木片の下で多くの個体を見ることができた。(Kishidaia 41号参照)

- 5.2. *T. yunohamense* Bös. et Str. ユノハマヒメグモ  
神武寺 境内の湿った、あまり明るくない崖に生えたイワタバコやシダなどの葉裏より糸を引いて不規則網を張っている。6月頃に淡茶色をした卵のうを作る。
- Linyphiidae
- 5.3. *Arcuphanthes tamaensis* (Oi) タマヤミサラグモ  
全域 湿った崖のくぼみや草の根元、落葉の間などにシート網を張り、下面に占座している。クモは常に網の中にはおらず、昼間や驚いた時などは網の一端の決った場所に潜んでしまうことが多い。かなりの個体数を見ることができる。
- 5.4. *Bathyphantes robustus* Oi クロテナガグモ  
全域
- 5.5. *Doenitzius peniculus* Oi デニッツサラグモ  
武山丘陵・南海岸 南海岸では毘沙門洞窟（奥行5mほどの海蝕洞）の中の石の下より得られた。
- 5.6. *Linypbia brongersmai* (He LSDingen) チビサラグモ  
〔神武寺(町田・松下:1940)〕
- 5.7. *L. oidedicata* (He LSDingen) ヘリジロサラグモ  
全域 草原の辺や路端の草の中に網を張る。網は地上10~15cmほどのところに張り、網の下面に占座している。5月に交接個体を見かけた。
- 5.8. *Prolinypbia yunohamensis* (Bös. et Str.) ユノハマサラグモ  
神武寺・〔二子山〕
- 5.9. *Meioneta concava* Oi クボミケシグモ  
二子山
- 5.10. *M. obliqua* Oi ナナメケシグモ  
武山丘陵
- 5.11. *Ostearius melanopygius* (O. P. Camb.) スソグロサラグモ  
剣崎・雨崎 落葉の間や崖のくぼみにシート網を張り、その下面に占座している。
- Erigonidae
- 5.12. *Aprifrontalia mascula* (Karsch) コサラグモ  
〔武山丘陵・大楠山(大野・八木沼:1971)〕
- 5.13. *Asperthorax communis* Oi ザラアカムネグモ  
武山丘陵 落葉の間や崖のくぼみにシート網を張り、その下面に占座している。

- 6 4. *Diplocephalooides saganus* (Bös. et Str.) ハラジロムナキグモ  
田浦・武山丘陵・南海岸  
草の根元近く、地上5cmほどのところにシート網を張る。
- 6 5. *Erigonidium naniwaense* Oi ナニワナンキングモ  
剣崎  
海岸に打ち上げられて少々古くなった海草クズのかたまりの中より採集した。海草クズの中には小形のハエやトビムシなどの多くの昆虫類が見うけられ、ナニワナンキングモのほかにもスソグロサラグモ・セスジアカムネグモが多数採集できた。
- 6 6. *Gnathonarium dentatum* (Wider) ニセアカムネグモ  
田浦
- 6 7. *Nematogmus sanguinolentus* (Walck.) チビアカサラグモ  
田浦・〔大楠山〕
- 6 8. *Oedothorax erigonoides* Oi トガリアカムネグモ  
荒崎・剣崎
- 6 9. *O. insecticeps* Bös. et Str. セスジアカムネグモ  
剣崎・〔神武寺・衣笠・大楠山〕
- 7 0. *Oia imadatei* (Oi) イマダテテングヌカグモ  
神武寺・田浦・武山丘陵  
落葉層をフルイで振って採集し、12月～3月頃まで成体を見ることができた。
- 7 1. *Solenysa mellotteei* Simon アリマネグモ  
二子山・武山丘陵  
前種と同じくフルイを振って採集した。冬期の落葉層内から非常に良く採集することができる。褐色がかかった赤色の目立つクモである。  
*Mimetidae*
- 7 2. *Ero japonica* Bös. et Str. センショウグモ  
全城・猿島・城ヶ島  
*Sympytognathidae*
- 7 3. *Conoculus lyugadinus* Komatsu ヨリメグモ  
神武寺・田浦  
*Theridiosomatidae*
- 7 4. *Ogulnius pullus* Bös. et Str. ヤマシグモ  
二子山・武山丘陵  
*Araneidae*
- 7 5. *Acusilas coccineus* Simon ハツリグモ  
神武寺・上山口

7 6. <i>Araneus fuscocoloratus</i> Bös. et Str.	ヤミイロオニグモ
神武寺・猿島・城ヶ島	
7 7. <i>A. subpulatus</i> Bös. et Str.	ヘリジロオニグモ
観音崎・剣崎・猿島・城ヶ島	
7 8. <i>A. ventricosus</i> (L. Koch)	オニグモ
全域・猿島・城ヶ島	
7 9. <i>A. lugubris</i> (Walck.)	コゲチャオニグモ
雨崎	
8 0. <i>A. abscissus</i> (Karsch)	キザハシオニグモ
神武寺	
8 1. <i>A. ejusmodi</i> Bös. et Str.)	ヌサオニグモ
上山口・〔神武寺・鷹取山・観音崎〕	
8 2. <i>A. pentagrammicus</i> (Karsch)	アオオニグモ
神武寺・武山丘陵	
8 3. <i>A. semilunaris</i> (Karsch)	マルヅメオニグモ
神武寺	
8 4. <i>Neoscona doenitzi</i> (Bös. et. Str.)	ドヨウオニグモ
武山丘陵・〔神武寺・鷹取山・衣笠・大楠山〕	
8 5. <i>N. mellotteei</i> (Simon)	ワキグロサツマノミダマシ
全域・猿島・城ヶ島	
8 6. <i>N. scylloides</i> (Bös. et Str.)	サツマノミダマシ
全域・城ヶ島	
ワキグロサツマノミダマシとサツマノミダマシは同じ場所に混棲しているが、武山丘陵での観察ではサツマノミダマシは6月頃に成体が見られ、その時ワキグロサツマノミダマシは(-3~2)令ほどで、成体の出現期が1ヶ月ほどずれているのが見られた。	
8 7. <i>N. nautica</i> (L. Koch)	イエオニグモ
全域	
8 8. <i>N. scylla</i> (Karsch)	ヤマシロオニグモ
全域	
8 9. <i>Zilla astridae</i> (Strand)	サガオニグモ
神武寺	
9 0. <i>Z. sachalinensis</i> (Saito)	カラフトオニグモ
神武寺・二子山	
9 1. <i>Argiope aetherea</i> Bös. et Str.	チユウガタコガネグモ
三崎口・〔神武寺・二子山〕	

9 2.	<i>A. amoena</i> L. Koch	コガネグモ
	[神武寺(町田・松下: 1940) 武山丘陵・衣笠・大楠山]	
9 3.	<i>A. bruennichii</i> (Scopoli)	ナガコガネグモ
	全域・猿島・城ヶ島	
9 4.	<i>A. minuta</i> Karsch	コガタコガネグモ
	全域・城ヶ島	
9 5.	<i>Chorizopes nipponicus</i> Yaginuma	ヤマトカナエグモ
	神武寺・二子山	
9 6.	<i>Cyclosa atrata</i> Bös. et Str.	カラスゴミグモ
	武山丘陵・[神武寺・大楠山]	
9 7.	<i>C. insulana</i> (Costa)	シマゴミグモ
	猿島・[神武寺]	
9 8.	<i>C. laticauda</i> Bös. et Str.	キジロゴミグモ
	神武寺	
9 9.	<i>C. octotuberculata</i> Karsch	ゴミグモ
	全域・猿島・城ヶ島	
1 0 0.	<i>C. sedeculata</i> Karsch	ヨツデゴミグモ
	全域	
1 0 1.	<i>Cyrtarachne bufo</i> (Bös. et Str.)	トリノフンダマシ
	神武寺・田浦・[大楠山]	
1 0 2.	<i>C. inaequalis</i> Thorell	オオトリノフンダマシ
	神武寺・二子山・田浦	
1 0 3.	<i>C. nagasakensis</i> Strand	シロオビトリノフンダマシ
	田浦・大楠山・[神武寺]	
1 0 4.	<i>C. nigra</i> Yaginuma	クロトリノフンダマシ
	田浦	
1 0 5.	<i>Larinia argiopiformis</i> Bös. et Str.	コガネグモダマシ
	田浦・観音崎・荒崎・猿島・城ヶ島・[神武寺]	
	海岸沿の、風が強く当る草原やカヤ原により多く棲息していた。	
1 0 6.	<i>Meta reticuloides</i> Yaginuma	ヤマジドヨウグモ
	神武寺・二子山・武山丘陵・猿島	
	日の当らない、よく湿った崖や川沿いの崖などに円網を張っている。網はほぼ垂直で、斜面にそって崖などからあまり離さずに張っていた。	
1 0 7.	<i>M. yunohamensis</i> Bös. et Str.	メガネドヨウグモ
	[神武寺(町田・松下: 1940)]	

108. *Nephila clavata* L. Koch ジョロウグモ  
全域・猿島・城ヶ島
109. *Ordgarius hobsoni* (O. P. Camb.) マメイタイセキグモ  
神武寺
- 卵のうだけの採集で、個体は確認していない。卵のうはカシの葉の間に不規則網状に張った保持糸の中につるされていた。卵のうは暗褐色で、トリノフンダマシの卵のうにトゲをつけた形をしている。大小2個が並んでつるされており、大きい方はトリノフンダマシの卵のうほどで、小さい方はそれを2まわりほど小さくした大きさである。この卵のうは両方ともフ化しなかった。このクモは県内でも4~5回の記録がある。しかし、これらがその採集場所でフ化し成長したことは疑問で、より暖かい地方(伊豆か?)でフ化した幼体がバルーニングで飛来し、成長したものではないかと思われる。
110. *Polys illipepidus* C. Koch ゲホウグモ  
神武寺
- Tetragnathidae
111. *Leucauge magnifica* Yaginuma オオシロカネグモ  
全域・城ヶ島
112. *L. subblanda* Bös. et Str. コシロカネグモ  
全域
113. *L. subgemmea* Bös. et Str. キララシロカネグモ  
全域
- ※ シロカネグモ属ではこのほかに、植村氏の記録中に *L. blanda* が記録されており、これは今日のチュウガタシロカネグモに当るもので、今回の記録に含まれるべきものであったが、当時(1938年)まだオオシロガネグモが記載されておらず、植村氏が採集された *L. blanda* が眞の *L. blanda* であるか不明であり、かつ、現在チュウガタシロカネグモが三浦に分布することは疑問であるので、今回は眞にチュウガタシロカネグモが採集されるまで記録を保留した。なお、三浦からは現在知られている *Leucauge* 以外の種が得られている。
114. *Tetragnatha japonica* Bös. et Str. ヤサガタアシナガグモ  
全域
115. *T. praedonia* L. Koch アシナガグモ  
全域
116. *T. squamata* Karsch ウロコアシナガグモ  
神武寺・秋谷
- Urocteidae
117. *Uroctea compactilis* L. Koch ヒラタグモ

全域・猿島・城ヶ島

Agelenidae

118. *Agelena limbata* Thorell クサグモ  
全域・猿島・城ヶ島
119. *A. opulenta* L. Koch コクサグモ  
全域・猿島・城ヶ島
120. *Cicurina japonica* (Simon) コタナグモ  
観音崎・雨崎  
水のしみ出てくる崖下の石の下と、海岸から少し離れた所に放置された丸太の下より採集した。

121. *Coelotes exitialis* L. Koch ヤチグモ  
観音崎・雨崎・武山丘陵
122. *C. insidiosus* L. Koch シモフリヤチグモ  
全域・城ヶ島
123. *C. kitazawai* Yaginuma アズマヤチグモ  
全域
124. *C. luctuosus* L. Koch メガネヤチグモ  
全域・猿島
125. *C. modestus* Simon ヤマヤチグモ  
全域
126. *Litisedes shirahamensis* Oi イソタナグモ  
剣崎・荒崎・南海岸  
海蝕台・海蝕崖などの岩のすき間や石の下、流木などから網を張り出している。冬期は石の下や流木の下などに袋状の越冬住居を作っている。

このクモはシマミヤグモ・イソハエトリ同様海岸からあまり離れない陸縁分布を示す。海岸以外にも棲息可能な環境が河川や山地、もしくはより近い場所にあったとしてもそこでは見るこちができず、閉鎖的な場所と違い、開かれた場所での限られた分布というのにおもしろい。

127. *Cybaeus nipponicus* (Uyemura) カチドキナミハグモ  
〔神武寺(町田・松下: 1940)〕
- Hahniidae
128. *Hahnia corticicola* Bös. et Str. ハタケグモ  
〔神武寺(町田・松下: 1940)〕  
この種のほかに落葉層の中よりハタケグモの一種が多く採集されている。

Pisauridae

KISHIDAIA No.45 1980, Mar

129. *Dolomedes angustivirgatus* Kishida スジボソハシリグモ  
〔神武寺(町田・松下: 1940)〕
130. *D. fimbriatoides* Bös. et Str. スジチャハシリグモ  
〔武山丘陵・衣笠・大楠山(大野・八木沼: 1971)〕
131. *D. hercules* Bös. et Str. スジボケハシリグモ  
〔鷹取山・武山丘陵・大楠山(大野・八木沼: 1971)〕
132. *D. raptor* (Bös. et Str.) アオグロハシリグモ  
田浦・〔神武寺〕
133. *D. sulfureus* L. Koch イオウイロハシリグモ  
全域・城ヶ島
- Lycosidae
134. *Arctosa depectinata* (Bös. et Str.) カガリビコモリグモ  
田浦  
畠地を徘徊していた。畠地や荒地など、よく日の当る所に多いように思われる。
135. *Lycosa pseudoannulata* (Bös. et Str.) キクヅキコモリグモ  
大楠山・三崎口  
いずれも水田にて採集した。
136. *Pardosa astrigera* L. Koch ウヅキコモリグモ  
全域
137. *P. laura* Karsch ハリゲコモリグモ  
全域
138. *P. yaginumai* Tanaka キシベコモリグモ  
城ヶ島  
石の多い海岸に見られた。
139. *Pirata clercki* (Bös. et Str.) クラークコモリグモ  
大楠山
140. *P. piraticus* (Clerck) カイゾクコモリグモ  
神武寺
141. *P. procurvus* (Bös. et Str.) チビコモリグモ  
武山丘陵
142. *Tricca japonica* Simon ヒノマルコモリグモ  
〔神武寺(町田・松下: 1940)〕
- Oxyopidae
143. *Oxyopes sertatus* L. Koch ササグモ  
全域

Thomisidae

144. *Misumenops japonicus* (Bös. et Str.) コハナグモ  
上山口
145. *M. tricuspidatus* (Fabricius) ハナグモ  
全域・猿島・城ヶ島
146. *Oxyptila decorata* Karsch キハダカニグモ  
田浦・秋谷・城ヶ島・〔神武寺〕
147. *Oxytate striatipes* L. Koch ワカバグモ  
全域  
5月頃に広葉樹の葉や幅のある草の葉に卵のうを作り、卵のうの上に乗って保護しているところを見ることができた。
148. *Philodromus roseus* Kishida エビグモ  
〔神武寺(町田・松下: 1940)〕
149. *P. spinitarsis* Simon キハダエビグモ  
三崎口・〔神武寺〕
150. *P. subaureolus* Bös. et Str. アサヒエビグモ  
全域・猿島・城ヶ島
151. *Pistius truncatus* (Pallas) ガザミグモ  
全域・城ヶ島
152. *Synaema takashimai* (Uyemura) アマギエビスグモ  
神武寺
153. *Thomisus labefactus* Karsch アズチグモ  
全域・城ヶ島
154. *Tibellus tenellus* (L. Koch) シャコグモ  
全域・猿島・城ヶ島
155. *Tmarus piger* (Walck.) トラフカニグモ  
全域・城ヶ島
156. *T. rimosus* Paik セマルトラフカニグモ  
全域  
トラフカニグモとセマルトラフカニグモは、サツマノミダマシで見られたように、同じ場所に混棲しているが、出現期に差がある。
157. *Xysticus atrimaculatus* Bös. et Str. クロボシカニグモ  
〔城ヶ島(大野・八木沼: 1971)〕
158. *X. croceus* Fox ヤミイロカニグモ  
全域・猿島・城ヶ島

159. *X. saganus* Bös. et Str. オオヤミイロカニグモ  
〔観音崎・大楠山・城ヶ島(大野・八木沼: 1971)〕
160. Gen. et sp. indet. イボカニグモ  
神武寺 (Ibokanigumo)  
千葉や三重など各地でかなり採集されているが、所属不明のために今だ記載されていない。町田・松下両氏の報文中に“46. *Xysticus* sp. 幼蛛なる為種名不詳なれど新種ならん。腹部に多数の突起を認むる點注目に値す。(植村氏に依る。4月30日町田採集)”とあるが、この記述のクモはイボカニグモであると思われる。
- Salticidae
161. *Aelurillus festivus* L. Koch ヤマジハエトリ  
田浦  
4月～5月にかけ野原や路端の草の間に成体が見られる地上徘徊性のハエトリグモである。
162. *Bianor pullus* Bös. et Str. キレワハエトリ  
田浦・三崎口  
落葉層の表面や落葉の間を徘徊しているほか、草原の地面でも見ることができた。
163. *Carrhotus xanthogramma* (Latreille) ネコハエトリグモ  
全域・猿島・城ヶ島
164. *Dendryphantes atratus* (Karsch) カラスハエトリ  
上山口・秋谷・〔神武寺・城ヶ島〕
165. *Evarcha albaria* (L. Koch) マミジロハエトリ  
全域
166. *Harmochirus brachiatus* (Thorell) ウデブトハエトリ  
田浦・観音崎・〔神武寺・衣笠・畠山〕
167. *Hasarius doenitzi* Karsch デニッツハエトリ  
全域
168. *Icius linea* (Karsch) メガネアサヒハエトリ  
大楠山・〔観音崎〕
169. *Jotus abnormis* Bös. et Str. チャイロアサヒハエトリ  
〔武山丘陵・二子山・衣笠・観音崎・大楠山(大野・八木沼: 1971)〕
170. *J. difficilis* Bös. et Str. マガネアサヒハエトリ  
全域・城ヶ島
171. *Laufelia aenea* Simon エキスハエトリ  
〔大楠山(ヨゴレハエトリニ植村: 1938)〕
172. *Marpissa elongata* (Karsch) ヤハズハエトリ

[ 城ヶ島( 大野・八木沼 : 1971 ) ]

173. *M. magister* (Karsch) オスクロハエトリ  
田浦・城ヶ島
174. *M. pulla* (Karsch) ヨダンハエトリ  
田浦・武山丘陵・[ 衣笠・観音崎・大楠山 ]
175. *Menemerus confusus* Bös. et Str. シラヒゲハエトリ  
田浦・観音崎・三崎口・猿島
176. *M. himeshimensis* (Dön. et Str.) イソハエトリ  
剣崎・観音崎・荒崎・秋谷・城ヶ島  
海岸性のハエトリグモで、名の示すように磯浜の岩上を徘徊している。砂浜は好みないようだが、小石でできた海岸には時々見ることができる。また、磯浜のほかに漁港や砂浜にある建物や屏風にも見られ、徘徊性種のためか海岸から少々離れた住宅地の壁や屏風にも見ることができた。冬期は磯浜の岩のくぼみや割目、海岸の岩の下などに袋状の越冬住居を作る。
177. *Myrmarachne innermichelis* Bös. et Str. ヤサアリグモ  
全域・城ヶ島
178. *M. japonica* (Karsch) アリグモ  
全域・猿島・城ヶ島
179. *Plexippus paykulli* (Audouin) チャスジハエトリ  
三崎口・猿島・城ヶ島  
海岸の近くに多く見られるが、時々内陸(丹沢・秩父)でも採集されている。
180. *P. setipes* Karsch ミスジハエトリ  
神武寺・観音崎
181. *Silerella vittata* (Karsch) アオオビハエトリ  
全域・猿島・城ヶ島  
アリを襲うクモとして有名で、アリの行列の近くには必ずと言ってよいほど見ることができ、アリを襲うところもよく観察することができる。
182. *Telamonia bifurcilinea* Bos. et Str. キアシハエトリ  
[ 鷹取山・大楠山( 大野・八木沼 : 1971 ) ]
- Clubionidae
183. *Chiracanthium eutittha* Bös. et Str. アシナガコマチグモ  
神武寺・観音崎・大楠山・城ヶ島
184. *C. japonicum* Bös. et Str. カバキコマチグモ  
全域・[ 城ヶ島 ]
185. *C. lascivum* Karsch ヤマトコマチグモ

## 田浦

186. *C. unicum* Bös. et Str. ヤサコマチグモ  
猿島
187. *Clubiona japonica* L. Koch ヤマトフクログモ  
大楠山・〔神武寺〕
188. *C. jucunda* (Karsch) ヤハズフクログモ  
全域
189. *C. kurilensis* Bös. et Str. ヒメフクログモ  
大楠山
190. *C. vigil* Karsch ムナアカフクログモ  
全域・城ヶ島
191. *Itatsina praticola* (Bös. et Str.) イタチグモ  
全域
192. *Orthobula crucifera* Bös. et Str. オトヒメグモ  
二子山・武山丘陵・〔観音崎〕  
落葉層の中を徘徊しているのがよく見うけられる。
193. *Phrurolithus komurai* Yaginuma コムラウラシマグモ  
田浦・安針塚・二子山  
落葉層の中を徘徊しており、表面を徘徊することはほとんどないようである。
194. *P. nipponicus* Kishida ウラシマグモ  
全域・城ヶ島
195. *P. pennatus* Yaginuma ヤバネウラシマグモ  
武山丘陵・三崎口・〔観音崎〕
196. *Trachelas japonicus* Bös. et Str. ネコグモ  
神武寺・〔武山丘陵・大楠山〕
- Anyphaenidae
197. *Anyphaena pugil* Karsch イズツグモ  
二子山
- Heteropodidae
198. *Heteropoda forcipata* (Karsch) コアシダカグモ  
神武寺
199. *H. venatoria* (Linné) アシダカグモ  
全域  
人家内に普通に見られる。
- Ctenidae

200. *Anahita fauna* Karsch

シボグモ

## 全域

7月頃に葉の表面と、落葉の裏に卵のうを作っている個体を確認した。葉（地表から15cmほどの幅の広い葉）の表面を利用したクモは、写真を撮ろうとしただけで卵のうを放棄して逃走してしまったが、落葉裏のクモは少々触れてもジッと卵のうを保護していた。同一種でこのように差があるのはおもしろい。

## Gnaphosidae

201. *Drassodes striatus* (Kishida)

トラフグモ

## 武山丘陵

202. *Gnaphosa kompirensis* Bös. et Str.

メキリグモ

〔神武寺（町田・松下：1940）・大楠山〕

203. *Zelotes asiaticus* Bös. et Str.

クロチャケムリグモ

## 二子山

以上203種が1979年6月現在までに確認することのできた種である。なお、今回報告した203種のうち、私が再・新記録した種は178種である。これは全記録種の88%にあたり、以前より比較的広い範囲（県・市・山塊等）の総合リストを作成する場合は200種以上、自己採集率が全体の80%以上必要という意見に沿うため、ここに自らの記録として発表した。

調査の期間は1973年から1979年6月までの6年あまりの長い期間であったが、分布状態の数値的分析を目的とした調査は行なっていないので、半島内のクモ相を考察するには至らなかった。しかし、6年間を通算すると四季を通しての調査は行なっており、調査地域もほぼ全域にわたっているので、三浦半島のクモの概様はこれでつかめるものと考えている。

三浦半島は前記したように、半島内を年平均気温15°Cの等温線が横切っており、これは本州南岸線としても有名な分布境界線となっている。これが通過する三浦半島は、この点を見るだけならば北方系種と南方系種の入り混る、たいへん変化に富んだ場所であるように思われるが、実際はリストを見ておわかりのように、北方系色を示すクモは見られず、南方系色を示すクモもアカイソウロウグモ・マメイタイセキグモ・ゲホウグモ・イボカニグモ・アシダカグモが確認される程度である。これは、南・北方系色の強いクモは八木沼氏（1969）が述べているように、分布境界線以前で南下・北上が停止しているためであると言える。そして、本州南岸線を見ると北方系種は南方系種に比べ、その傾向をより強く示しているように思われる。

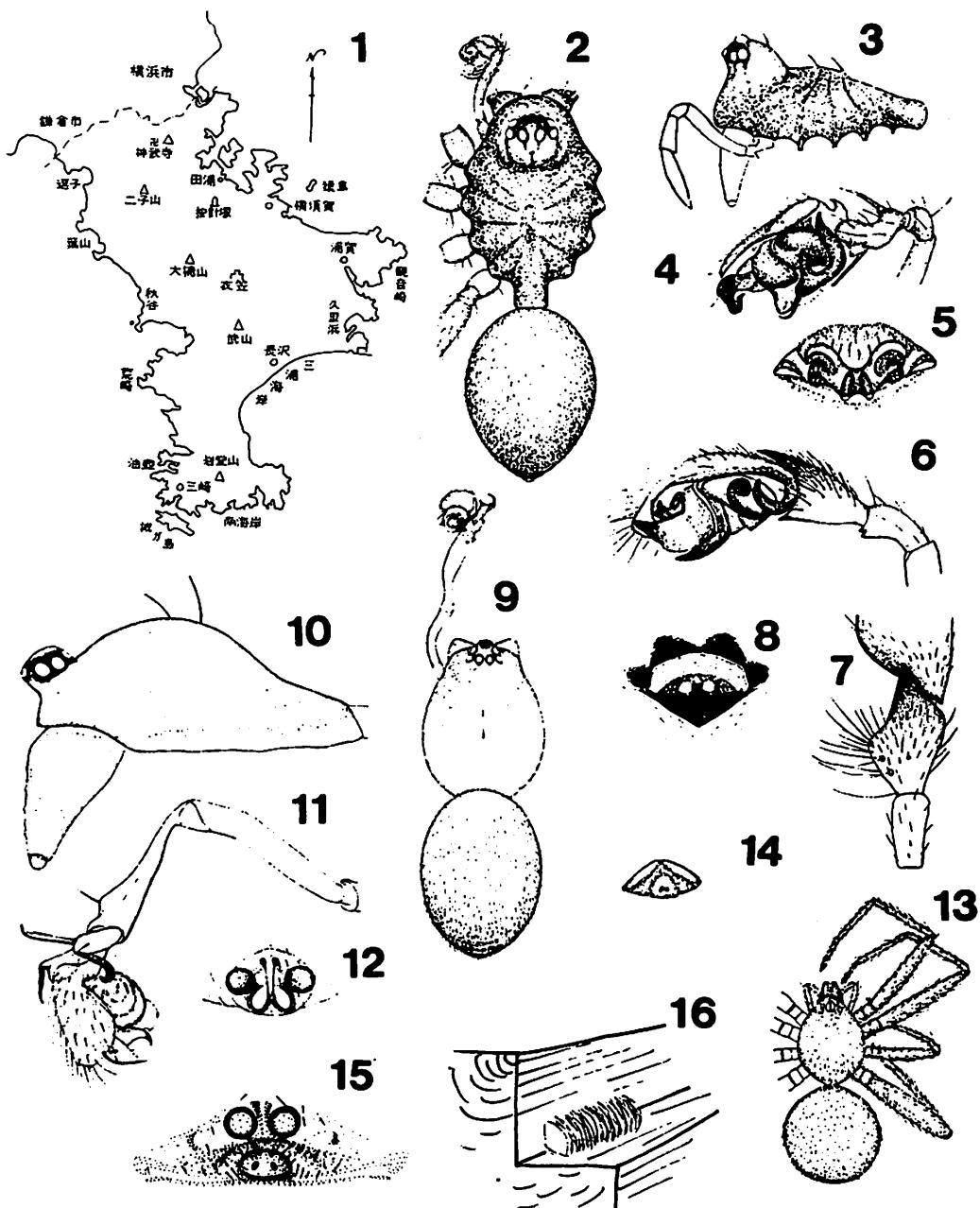
ここで記した南方系種のうちマメイタイセキグモ・ゲホウグモ、三浦からは記録されていないが、オダカグモ・キジロオヒキグモ・ソメワケトリノフンダマシなどは三浦以北の、より年平均気温の低い地域でも見ることができ、なおかつセスジガケジグモ・ハナサラグモ・ナカムラオニグモ・イナズマクサグモ・カラフトコモリグモのような北方系種と地域を同一にして分布しているが見られる。このような両系統の種が分布境界として緩衝している線は、この周辺（神奈川・東

京・埼玉)を見る限りでは、年平均気温14°C前後ではないかと思っている。分布境界線については八木沼氏も述べているように、気温以外の諸要因(日照・降雨・地形地理・海流などが考えられる)や、クモ自体の持つ環境の変化(各年による気候の変化が主)に適応してのこまか南北下・北上等、その要因についてはまだまだ検討せねばならない点が多く、ここでは本州南岸線の通過する三浦半島を中心と現在まで各地で調査した結果により推測した意見を述べてみた。この点についてはより専門的な研究も必要と思われるが、今後注意してゆきたいと考えているが、これに関して目を向けていただけの方が出てきてくれることを希望している。

以上のように、三浦半島からは203種のクモが確認されたが、これにより調査が終了したのではなく、内容を見ていたいでもまだ調査不足なものであるということと、これは単なる基礎資料であるということがおわかりのことと思う。今回はリストから少々逸脱して分布境界線についての意見も述べてしまったが、今後はこのような問題も頭に置き、それぞれの地域で調査活動をしてリストを発表する人たちと共に、リストを作成してゆく上で、そして完成した上で出てくる、より多くの問題点を一つでも解決してゆきたいと考えている。

#### 参考文献

- 植村利夫, 1938. 蜘蛛研究室彙報(2), 神奈川県大楠山の蜘蛛. *Acta arachnol.*, 3: 19-20
- Oi, R., 1955. A new species of Genus *Orchestina* from Japan. *Acta arachnol.*, 14: 41-44
- , 1960. Linyphiid Spiders of Japan. *J. Inst. Polytech., Osaka City Univ.*, (D) 11: 137-244, pls. 1-26
- , 1964. A supplementary note on Linyphiid spiders of Japan. *J. Biol. Osaka City Univ.*, 15: 23-30. pls. 1-3
- 大野正男・八木沼健夫, 1971a. 日本産真正蜘蛛類分布資料(I), II. 神奈川県三浦半島の真正蜘蛛類. 東洋大紀教養(自科) 13: 25-29
- , —, 1971b. 同上, II. 神奈川県城ヶ島の真正蜘蛛類. 同上, 29-30
- 柴田敏明, 1968. 三浦半島の爬虫類相. *Sci. Rep. Yokosuka City Muse.*, 14: 95-102
- 富岡畦草, 1967. 湘南の散歩みち. 山溪文庫36. 山と渓谷社, 東京.
- 細野善熙, 1940. イソハエトリグモの分布に関する追加報告. *Acta arachnol.*, 5: 30-31
- 町田徳治・松下傳吾, 1940. 神奈川県神武寺附近産蜘蛛. *Acta arachnol.*, 5: 76-80
- 松本誠治・新海栄一・小野展嗣, 1976. 学研の図鑑・クモ. 学研, 東京
- 八木沼健夫, 1969. クモの分布から見た本州南岸線. 昆虫と自然4(11): 2-5
- 山川守・熊田憲一, 1973. 丹沢山塊の真正蜘蛛類. *Atypus*, (60): 31-54
- , —, 1979. 丹沢山塊の真正蜘蛛類II. *Atypus*, (74): 1-14



1. 三浦半島全図, 2. *Solenysa mellotteei* ♂, 3. 同♀頭胸部, 4. 同♂触肢  
 5. 同♀外雌器, 6. *Erigonidium naniwaense* ♂触肢, 7. 同, 8. 同♀外雌器,  
 9. *Oia imadatei* ♂, 10. 同♂頭胸部, 11. 同♂触肢, 12. 同♀外雌器, 13. *Orc-hestina sanguinea* ♀, 14. 同♀外雌器, 15. *Dipoena mutilata* ♀外雌器,  
 16. *Oecobius annulipes* のトンネル状住居, 2-14, Oi (1958·1960·1964)  
 より。

KISHIDAIA No.1980, Mar

## DRAGLINE

### 台湾の網を張るコモリグモ

吉田 哉

台湾に網を張るコモリグモである *Hippasa* の一種がいることは、李長林の「台湾之蜘蛛」などで知られている。1977年7月に台湾へ渡った時は全く気づかなかったが、今回(1979年3月末)偶然道ばたで見つけてから良くさがしてみると、案外多く生息していることがわかった。埔里の近くの南山渓は、奥まで道の両側が果樹園になっている。ここ下草の上で、道に近い日当たりの良い所に多く、いくつもの網が見られる。クサグモのような網で、トンネルは草の根元まで続いている。採集しようと近づくと、す早くトンネルを通って逃げざる。採集したクモは雌雄ともほとんどが成体になっていた。

### 飼育中のアシダカグモの産卵行動

松浦祐司

6月2～3日にかけて飼育中のアシダカグモが、産卵しましたので簡単に紹介します。

産卵に要した時間は、2日午後11:00頃より3日午前0:30頃までの1時間半で、まず最初に飼育瓶の壁面に長径55mm程の広さに、ほぼ全面糸で対面が見えなくなるまで、くまなく張り廻らし、次にその中央部の直径30mmぐらいを、特に厚く弾力のあるように、糸を少しづつたるませぎみに張ってゆく。この間約30分程。これが終ると暫くの間休んだ後(たぶんクモは、排卵に備えているのであろう。)に、中央部に下向きの状態で産卵を始める。これが終ると、再び糸を上から張り廻らし卵を包み込む。ここで糸を張る行動は終りであるが、これではアシダカグモ特有のコイン型の卵のうではない。そこでクモは一番最初に張り廻らした糸を、一脚と触肢で卵の上にかぶせた糸の方へ剥がしてゆき、そこで上に張った糸とからみ合わせながら整形してゆき、コイン型卵のうの出来あがりである。

出来た卵のうの直径は25mm、厚さは7mmであった。尚、飼育瓶の大きさは直径100mm、高さ150mm程の円筒形で、産卵した壁面は垂直である。

### 卵のうから出たムシ

蓮沼克己

1979年6月19日、埼玉県入間市の狭山湖でキアシハエトリ *Telamonia bifurcilinea* Bois. et Str.) を採集した。はじめて見るクモなので、どんな生活をするか、飼育して見たところ、6月25日に産卵した。卵のうは、長径3.5mm×短径2.5mmぐらいで、卵を包む糸は薄く、中の卵は外からも見え、13卵が数えられた。

(8頁IC続く)

## 東京蜘蛛談話会観察会報告 1977年春～1979年冬

### 巾着田のクモ

鳴田順一・田中理恵

本報告は東京蜘蛛談話会の季節ごとの調査の第2回目（第1回は八王子城跡）の結果である。

採集地は埼玉県日高町にある周囲を高麗川に囲まれた巾着田と呼ばれている場所である。巾着田の埼玉県における位置と形状は図に示した通りで、その名の通り巾着袋に似た形状を持っていることがわかる。また、外秩父とか奥武藏とよばれる低い山地と関東平野との境界にあたり、四季を通じてハイキングコースの一部になっている。しかしながら、人口の増加とともに、水資源の確保のためにここを貯水池にする計画がなされており、近い将来には、なくなる場所である。

巾着田における水田面積はほぼ半分で残りはクヌギヤコナラの雑木林、桑畠などである。

今回の結果は四季別一覧表に示した通りで、各季節ごとの採集および観察記録は、50種類前後であった。また、1977年5月の採集観察会は、はげしい雨のために記録が少なかったため、談話会有志にて行った採集会（1978年4月）の記録をあわせて春の記録としてまとめた。

調査場所：埼玉県入間郡日高町にある通称、巾着田と呼ばれている場所

調査日及採集者

○第1回：1977年5月15日（日曜日）

採集者：小糸浩二・貞元巳良・佐藤幸子・鳴田順一・新海栄一・鈴木勝浩・高野伸二  
古浜 隆・松本誠治

○有志：1978年4月16日（日曜日）

採集者：熊田憲一・近藤恭子・貞元巳良・佐藤幸子・新海栄一・鈴木勝浩・並木敏一  
吉川伊智郎

○第2回：1978年7月30日（日曜日）

採集者：梅林力・梅林順一・梅林登・小沢実樹・熊田憲一・江井・権田重雄・  
佐藤幸子・鳴田順一・新海栄一・杉浦・鈴木勝浩・高野伸二・高野ツヤ子・  
高林桂子・田中理恵・長島忠義・並木敏一・林俊夫・藤井悦子

○第3回：1978年10月8日（日曜日）

採集者：貞元巳良・佐藤幸子・鳴田順一・新海栄一・高林桂子・田中理恵・高野伸二  
蓮沼克己・松浦祐司

○第4回：1979年2月18日（日曜日）

採集者：小沢実樹・熊田憲一・栗原輝代子・貞元巳良・鳴田順一・新海栄一・  
高橋登・高野伸二・田中理恵・藤井悦子・古浜隆・松浦祐司・松本誠治・  
松本憲



1978年7月30日 採集観察会



巾着田の埼玉県における位置  
と巾着田全図

## 四季別種類一覧表

- 属および種の配列は「日本産真正蜘蛛類目録」(八木沼、1977)による。
- 四季別一覧表は1977年5月と1978年4月を合せて春の採集記録とし以下、1978年7月(夏)・1978年10月(秋)・1979年2月(冬)の順に配列した。
- 一覧表に使用した齢期の記号は、Ad → (成体)、SubあるいはS → (亜成体)、y → (幼生)を示している。○印は幼生・亜成体・成体の全てが見られたものである。また、※は採集あるいは観察された記録はあるが齢期が不明なものである。

			春	夏	秋	冬
I Atypidae						
1. <i>Atypus karschi</i>	ジグモ	y	-	○	-	
II Dictynidae						
2. <i>Dictyna felis</i>	ネコハグモ	-	-	Ad	-	
3. <i>Latys puta</i>	キイロカレハグモ	Ad	-	-	-	
III Uloboridae						
4. <i>Miagrammopes orientalis</i>	マネキグモ	※	-	-	y	
IV Pholcidae						
5. <i>Pholcus crypticolens</i>	ユウレイイグモ	-	-	-	○	
V Theridiidae						
6. <i>Achaearanea tepidariorum</i>	オオヒメグモ	Ad	○	-	-	
7. <i>Anelosimus crassipes</i>	アシブトヒメグモ	-	-	y.s	sub	
8. <i>Ariamnes cylindrogaster</i>	オナガグモ	y	Ad	-	-	
9. <i>Argyrodes saganus</i>	ヤリグモ	※	-	y	-	
10. <i>Dipoena punctisparsa</i>	シモフリミジングモ	-	-	y	-	
11. <i>Enoplognatha japonica</i>	ヤマトコノハグモ	※	○	Ad	s.y	
12. <i>Episinus nubilus</i>	ムラクモヒシガタグモ	-	-	-	y	
13. <i>Stenmops nipponicus</i>	スネグロオチバヒメグモ	-	-	y	y	
14. <i>Theridion chikunii</i>	バラギヒメグモ	-	-	-	sub	
15. <i>T. japonicum</i>	ヒメグモ	-	-	Ad	-	
16. <i>T. latifolium</i>	ヒロハヒメグモ	-	-	y	y	
17. <i>T. sp.</i>	キヨヒメグモ	-	y	-	-	
18. <i>T. octomaculatum</i>	ヤホシヒメグモ	※	-	-	y	
19. <i>T. pinastri</i>	ムナグロヒメグモ	※	-	sub	-	
20. <i>T. subadulatum</i>	コケヒメグモ	※	-	-	-	

KISHIDAIA No. 45 1980, Mar

			春	夏	秋	冬
21.	<i>T. subpallens</i>	ハイイロヒメグモ	※	y	-	sub
<b>V Linyphiidae</b>						
22.	<i>Bathyphantes orientis</i>	テナガグモ	※	-	-	Ad
23.	<i>Linyphia oidesdicata</i>	ヘリジロサラグモ	-	-	-	y.s
24.	<i>Prolinyphia longipedella</i>	アシナガサラグモ	Ad	-	-	-
25.	<i>P. yunohamensis</i>	ユノハマサラグモ	Ad	-	y.s	-
<b>VI Erigonidae</b>						
26.	<i>Asperthorax communis</i>	ザラアカムネグモ	※	-	-	y
27.	<i>Erigone prominens</i>	ノコギリヒザグモ	-	Ad	-	-
28.	<i>Nematogmus sanguinolentus</i>	チビアカサラグモ	-	Ad	-	-
29.	<i>Oedothorax insecticeps</i>	セスジアカムネグモ	※	-	-	Ad
30.	<i>Solenysa mellotteei</i>	アリマネグモ	-	-	-	Ad
<b>VII Mimetidae</b>						
31.	<i>Ero furcata</i>	キタセンショウグモ	-	-	-	Ad
32.	<i>Mimetus japonicus</i>	ハラビロセンショウグモ	※	-	-	-
<b>VIII Symphytognathidae</b>						
33.	<i>Mysmena jobi</i>	ナンブコツブグモ	※	-	-	-
<b>X Araneidae</b>						
34.	<i>Acusilas coccineus</i>	ハツリグモ	y	-	-	-
35.	<i>Araneus macacus</i>	ヤエンオニグモ	-	-	y. Ad	-
36.	<i>A. ventricosus</i>	オニグモ	y	-	-	-
37.	<i>A. lugubris</i>	コゲチャオニグモ	-	Ad	y	-
38.	<i>A. abucissus</i>	キザハシオニグモ	-	-	-	y
39.	<i>A. cucurbitinus</i>	ハナオニグモ	Ad	-	-	-
40.	<i>A. eujusmodi</i>	ヌサオニグモ	y	y	-	y
41.	<i>A. mitificus</i>	ビジョオニグモ	-	y	-	-
42.	<i>A. pentagrammicus</i>	アオオニグモ	※	-	-	-
43.	<i>A. semilunaris</i>	マルズメオニグモ	-	-	y	-
44.	<i>A. viridiventris</i>	ハラビロミドリオニグモ	-	-	y	-
45.	<i>Neoscona doenitzi</i>	ドヨウオニグモ	-	y. Ad	Ad	sub
46.	<i>N. fuscocolorata</i>	ヤミイロオニグモ	-	-	y	-
47.	<i>N. mellotteei</i>	ワキグロサツマノミダマシ	-	Ad	-	-
48.	<i>N. scylla</i>	ヤマシロオニグモ	y	-	-	y
49.	<i>N. scylloides</i>	サツマノミダマシ	y	-	-	-

			春	夏	秋	冬
50.	<i>Yaginumia sia</i>	ズグロオニグモ	—	y	sub	—
51.	<i>Zilla astridae</i>	サガオニグモ	sub	—	—	—
52.	<i>Z. sachalinensis</i>	カラフトオニグモ	—	—	y	—
53.	<i>Argiope bruennichii</i>	ナガコガネグモ	—	○	Ad	—
54.	<i>Cyclosa argenteoalba</i>	ギンメッキゴミグモ	Ad	Ad	—	—
55.	<i>C. octotuberculata</i>	ゴミグモ	—	Ad	—	—
56.	<i>C. sedeculata</i>	ヨツデゴミグモ	※	○	—	—
57.	<i>Cyrtarachne bufo</i>	トリノフンダマシ	—	y.s	Ad	—
58.	<i>Larinia argiopiformis</i>	コガネグモダマシ	—	—	—	s.Ad
59.	<i>Meta yunohamensis</i>	メガネドヨウグモ	※	—	—	—
60.	<i>Nephila clavata</i>	ジヨロウグモ	y	y.s	Ad	—
61.	<i>Poltys illepidus</i>	ゲホウグモ	—	y	y.s	—
X Tetragnathidae						
62.	<i>Dyschiriognatha quadrimaculata</i>	ヨンボシヒメアシナガグモ	※	Ad	Ad	Ad
63.	<i>Leucauge magnifica</i>	オオシロカネグモ	sub	—	—	—
64.	<i>L. subblanda</i>	コシロカネグモ	y	—	—	—
65.	<i>Pachygnatha clercki</i>	アゴブトグモ	※	—	—	Ad
66.	<i>Tetragnatha caudicula</i>	トガリアシナガグモ	—	—	Ad	—
67.	<i>T. extensa</i>	ハラビロアシナガグモ	—	Ad	—	—
68.	<i>T. japonica</i>	ヤサガタアシナガグモ	—	Ad	—	—
69.	<i>T. praedonia</i>	アシナガグモ	Ad	Ad	—	—
70.	<i>T. squamata</i>	ウロコアシナガグモ	—	○	y	—
XI Urocteidae						
71.	<i>Urotea compactilis</i>	ヒラタグモ	※	—	—	—
XII Agelenidae						
72.	<i>Agelena limbata</i>	クサグモ	—	Ad	—	y
73.	<i>A. opulenta</i>	コクサグモ	—	y	—	—
74.	<i>Cybaeus nipponicus</i>	カチドキナミハグモ	※	—	—	—
XIII Pisauridae						
75.	<i>Dolomedes hercules</i>	スジボケハシリグモ	※	Ad	—	○
76.	<i>D. pallitarsis</i>	スジブトハシリグセ	※	—	y	—
77.	<i>D. raptor</i>	アオグロハシリグモ	—	—	—	y
78.	<i>D. sulfureus</i>	イオウイロハシリグモ	※	Ad	—	○
XIV Lycosidae						

			春	夏	秋	冬
79.	<i>Arctosa depectinata</i>	カガリビコモリグモ	—	Ad	—	—
80.	<i>A. ebicha</i>	エビチャコモリグモ	—	—	Ad	—
81.	<i>Lycosa pseudoannulata</i>	キクヅキコモリグモ	※	y	—	—
82.	<i>Pardosa astrigera</i>	ウツキコモリグモ	—	Ad	○	—
83.	<i>P. lausa</i>	ハリゲコモリグモ	—	Ad	—	y
84.	<i>Pirata piratoides</i>	イモコモリグモ	—	Ad	—	Ad
85.	<i>P. subpiraticus</i>	キバラコモリグモ	※	—	—	—
86.	<i>Trochosa terricola</i>	カラフトコモリグモ	—	—	—	Ad
XVI Oxyopidae						
87.	<i>Oxyopes badius</i>	クリチャササグモ	※	—	—	—
88.	<i>O. sertatus</i>	ササグモ	sub	○	y	y
XVII Thomisidae						
89.	<i>Misumenops japonicus</i>	コハナグモ	sub	—	—	—
90.	<i>M. tricuspidatus</i>	ハナグモ	y.s	s.Ad	y.Ad	sub
91.	<i>Oxyptila decolata</i>	キハダカニグモ	—	Ad	y	Ad
92.	<i>Oxytate striatipes</i>	ワカバグモ	Ad	—	—	sub
93.	<i>Philodromus flavidus</i>	キエビグモ	—	—	y	y
94.	<i>P. roseus</i>	エビグモ	—	—	—	y
95.	<i>P. spinitarsis</i>	キハダエビグモ	y	—	—	y
96.	<i>P. subaureolus</i>	アサヒエビグモ	y	—	—	y
97.	<i>Thomisus labefactus</i>	アズチグモ	—	Ad	Ad	—
98.	<i>Thanatus nipponicus</i>	ヤマトヤドカリグモ	—	—	—	y
99.	<i>Tmarus piger</i>	トラフカニグモ	—	—	—	sub
100.	<i>Xysticus croceus</i>	ヤミイロカニグモ	※	y	Ad	y
101.	<i>X. saganus</i>	オオヤミイロカニグモ	—	Ad	—	—
XVIII Salticidae						
102.	<i>Bianor pullus</i>	キレワハエトリ	—	—	—	sub
103.	<i>Carrhotus xanthogramma</i>	ネコハエトリ	Ad	y	sub	—
104.	<i>Dendryphantes atratus</i>	カラスハエトリ	—	—	—	y
105.	<i>Euophrys undulatovittata</i>	イナズマハエトリ	—	sub	y.Ad	—
106.	<i>Evarcha albaria</i>	マミジロハエトリ	※	—	—	—
107.	<i>Hasarius doenitzi</i>	デニッツハエトリ	—	—	Ad	—
108.	<i>Jotus difficilis</i>	マガネアサヒハエトリ	y	—	—	—
109.	<i>Marpissa elongata</i>	ヤハズハエトリ	※	—	—	—

			春	夏	秋	冬
			※	Ad	○	○
110.	<i>M. magister</i>	オスクロハエトリ	—	—	—	sub
111.	<i>M. pulla</i>	ヨダンハエトリ	—	—	—	—
112.	<i>Menemerus confusus</i>	シラヒゲハエトリ	—	y	—	—
113.	<i>Myrmarachne japonica</i>	アリグモ	y.Ad	○	sub	y
114.	<i>Plexippus setipes</i>	ミスジハエトリ	—	Ad	—	—
XIX Clubionidae						
115.	<i>Chiracanthium japonicum</i>	カバキコマチグモ	—	Ad	—	—
116.	<i>Clubiona japonicola</i>	ハマキフクログモ	—	—	Ad	Ad
117.	<i>C. vigil</i>	ムナアカフクログモ	y	—	—	y
118.	<i>Itatsina praticola</i>	イタチグモ	—	—	—	y
119.	<i>Phrurolithus nipponicus</i>	ウラシマグモ	—	—	—	y
120.	<i>Trachelas japonicus</i>	ネコグモ	—	—	—	Ad
XX Gnaphosidae						
121.	<i>Drassodes oculinotatus</i>	チャクロワシグモ	—	—	y	—
122.	<i>Gnaphosa kompirensis</i>	メキリグモ	※	—	—	—
合 計			58	47	42	51

巾着田における採集観察会の結果は以上の20科122種であった。この場所において、調査を継続し、さらに詳しい資料を作成したいと考えている。

## 編 集 後 記

今回より、Kishidaiiaの編集を熊田憲一氏より受け継ぎましたが、不慣れなこと也有って発行が遅れ会員の方々に御迷惑をかけたことと思います。

最近、Kishidaiiaにて原稿を書いて下さる人が同じ顔ぶれになっているようです。現在、会員が100名以上となっており、もっと多くの方々から原稿がきててもよいと思うのですが、会員1人1人のちょっとした観察記録やリストの投稿をまっております。

### 55・56年度運営委員

萱鳴 泉・熊田憲一・栗原輝代子・貞元巳良・鳩田順一・新海栄一・鈴木勝浩・高橋 登・蓮沼克己・松浦祐司

本会代表：萱鳴 泉 総務：新海栄一 会誌編集：鳩田順一

会計監査：大熊千代子・国見裕久

本部	〒191	東京都日野市豊田1896	萱鳴 泉
事務局	〒185	東京都国分寺市1-6-6	新 海 栄 一
原稿受付（編集局）	〒357	埼玉県飯能市本町5-4	鳩 田 順 一
信用原稿受付	〒211	神奈川県川崎市中原区刈宿612	松 浦 祐 司
会計受付	〒190-11	東京都西多摩郡羽村町羽1448	熊 田 憲 一
			振替 東京7-74885

KISHIDAI A No.45 1980年3月30日印刷 編集者 鳩田順一  
1980年3月31日発行 発行者 萱鳴 泉  
発行所 東京蜘蛛談話会  
〒191 東京都日野市豊田1896 萱鳴 泉方  
印刷 (有)須賀印刷  
〒350 埼玉県川越市小仙波町2-12-1